

2020

国語

〔帰国生入試〕

注 意

1. 試験時間は、8：50～9：40の50分です。
2. 問題は ㊦・㊧ の2つです。
3. 解答用紙に、受験番号と氏名を書きなさい。
4. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
5. 先生の指示があるまで、問題用紙をあけてはいけません。
6. 問題についての質問はうけつけません。
7. 試験が終わったら、解答用紙を裏返しにしておきなさい。

□ 次のカタカナの文章に句読点をほどこし、漢字ひらがな交じりの文章に書きかえなさい。(漢字で書けるものは全て漢字で書きなさい。)

ワタシタチハハルニナルトココロガウキタツタリアキニナルトモノガナシクカンジタリスルコトガアリマスソレハキツトハルニハナガヒラキアキニハガチルトイウシゼンノウゴキトカンケイガアルハズデスサマザマナデキゴトガアツテモキセツハカナラズメグツテキテシゼンツイタイカシタクラシライトナンデキタノデス

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

サハラ砂漠さばくの奥おくにある岩の台地を歩きまわっていたときのこと。同行していたラルビーというアルジェリア人の「自称じしやう」技師ぎしが、足どりの重くなった私の顔をのぞきこんで「ファティゲ？」ときいた。長らくフランスの植民地だったアルジェリアでは、アラビア語が公用語だが、(注)フランス語がそれに準じゆんじている。「ファティゲ？」とは「疲つかれたか？」という意味である。

たしかに疲つかれてはいたが、だらしがないと思われるのも a シャクしゃくなので、カラ元氣を出して「バ・ファティゲ(疲つかれてないよ)」と答えた。彼は安心したように先に立って進んで行ったが、いつもおくれがちな私が氣になるとみえて、やたらに「ファティゲ？」を連発した。

オアシスにもどると、好奇心こうきしんの強い彼は、日本語を教えてください、と言いだした。まわりにいるもの、あるものを片端かたはしから指さして、日本語で何というのだ？ときくのである。

①ラクダ、ロバ、ニワトリ、アリ、ヤシ、スナ、ソラ、タイヨー……、私がゆっくり発音して教えてやると、彼はちびたエンピツで手帳に、それをひとつ、ひとつ、アラビア文字で b 丹念たんねんに書き込んでいく。②そんな名詞のいくつかを覚えたところで、日本語が話せるようになるわけでもないのに、ラルビーは熱心で、いつまでたってもやめようとはいわなかった。

「それじゃ、ファティゲというのは？」

「ファティゲか。日本語ではツカレタだよ」

「トゥカレタ？ ふーん、トゥカレタか」

その翌日。彼は相変わらず私の先を歩いてしたが、ときどき私が追いつくのを待って、「ナイ・トゥカレタ？」ときいた。①私は思わず笑って「ナイ・ツカレタ」と答えた。フランス語の「パ (pas)」は、正確には「ヌ (ne)」と共に用いて否定をあらわすのだが、会話ではパだけで済ませることが多い。そのパは日本語でどう言うのかときかれ、私は「ない」だ、と教えたのである。否定は「ない」、肯定は「ある」だ、と。

ずいぶん、いい加減な教え方だが、彼はさっそく、それをフランス語の語順「パ・ファティゲ」に従って応用したわけである。しばらく歩くと、ラルビーはまたふりかえって、こんどは「アル・トゥカレタ？」ときいた。私は「意表をつかれ」(注2) ウイ、アル・ツカレタ」と答えて岩陰に腰を下ろした。そして、おなじ人間でありながら、どうして言葉の順序というものが、たがいにちがっているのだろうと、あらためて考えさせられた。

ものの名称が異なるというのは、べつに不思議なことではない。おなじ言葉を使う民族でも地域によって、ものの呼び名がちがうことは、さらにある。

(注3) 古歌にあるではないか。

草の名も所によりて変るなり

難波の葦は伊勢の浜荻

だが、語順(言葉の順序)や構造(文法)が異なるということは、名称のちがいはるかに越えて、考え方の相違を、はっきりと示している。なぜなら、④どんな民族も母国語の筋道に従って思考するからだ。英語にしても、フランス語にしても、否定詞は前にくる。だから、その語順でラルビーは「ナイ・トゥカレタ？」ときいたのだ。それは彼の頭のなかで、何よりも、否定か肯定か、が、まっ先に問題になったことを意味している。

それに対して日本人は、まず「疲れる」という事態が浮かび、ついで、その事態が肯定であるか、否定であるかを問う、ということになる。

(注4) はじめに状況ありき——これが日本人の考え方の出発点なのだ。

ところが、フランス語や英語、その他おなじような語順を持つ言葉を用いる人間は、最初に状況がどのようにあるか、を問いたです。こ

の発想の道筋は、そのまま語順に従っているわけである。

数日後。私はふたたびオアシスにもどり、ナツメ椰子の木陰で無為の午後をすごしていた。退屈をまぎらすために、日本から持ってきた文庫本のページを繰っている、おなじように時間を持て余していたラルビーはじめ、オアシスの住人であるトゥアレグ人の何人かの男たちが私を取り巻いた。そして、xたる顔付きで「何を読んでいるのか」と覗き込んだ。私がめくっていたのは(注5)『芭蕉俳句集』だったのである。

そこで、「これ、日本で、いちばん有名な詩人の詩集だよ」というと、彼らはいよいよ好奇心をつのらせて、「ほう、どんな詩なのかね」と説明を求めた。

ことわっておくが、ラルビーを介して交わされた以下の会話は、じつにひどいものだった。満足に会話もできないフランス語に英語をまじえ、手振りまで加えた(注6)『混淆語』で、どうして俳句の真意などつたえられよう。だが、それでも、結構、通じたのである。私が説明したのは「古池や蛙飛びこむ水のをと」だった。

サハラのアアシスにも泉に蛙はいる。だから砂に指で蛙の略画を描いてみせると、みな一樣にうなずいた。「その蛙が古い池に飛びこんだので水の音がした、というんだ」と教えると、みんなはだいたいわかったらしい。しかし、わかったのは蛙が池に飛びこんだという事実だけだった。なぜなら、彼らは、それで？と、つづきを催促したからだ。私が「それでおわりだ」というと、「え、⑤それだけで詩なのか」と、ラルビーまでが(注7)怪訝な顔でクビをひねった。私はこの句の背後にある意味など、説きようもなかった。けれど、それを説明しないかぎり、彼らにとつて、芭蕉のこの有名な句は、およそ取るにも足らぬ事実を、ただ述べているにすぎない。おどろくべき事件ならともかく、小さな生物が池に飛びこんで水音を立てた、などという「事実」は、何の関心も呼ばないのである。だから彼らは、そのつづき、つまりその「叙述」の「説明」を要求したのだ。「それが、どうかしたのか」というわけである。

が、しばし沈黙のあと、ラルビーは、ハタと膝を打った。そして、私にかわって、一同に講釈し始めた。その「説明」は、大意、こうである。

——お前たち、キャラバンで荷を運んだことがあるだろう。砂漠のなかの水場に到着したとき、リーダーがどうするか考えてみるよ。

まず、小石を拾って井戸へ投げこむじゃないか。そして、その音がきこえるまでの時間で深さの見当をつける。だから、水の音は、じつに大事なことを教えてくれるんだ。日本のこの詩人も、その古い泉の深さを知りたかったのさ。

私はあまりにもかけ離れた解釈に(注8)ア然とするほかなかったが、それ以上に、「事実」というものをどう受けとるか、その認識の相違を痛感させられたのだった。

日本人は、何よりもまず、事実を事実としてありのままに受けとめる。そして、事実を印象に刻むが、ことさら、その意味を問いたださうとしない。むしろ、各人の印象は各様であるうが、事実の解釈はめいめいの想像力に委ねるのである。しかし、多くの民族、とくにヨーロッパ人は、そうしたあいまいさを、できる限り排除しようとする。だから、ある事実が提示されたとき、彼らはそれが何を意味するのか、あくまで説明を求めてやまないのだ。

(中略)

言葉というものは、自分の考えや意志、感情、その他さまざまなものを伝達するという機能とともに、人間の思考を構成する重要な役割を持つ。

『日本・日本語・日本人』森本哲郎の文章による)

(注1) フランス語がそれに準じている：アルジェリアは、一八三〇年～一九六二年の間はフランスの支配下にあつたため、今でもフランス語が国民の間で広く用いられている。

(注2) ウィ：フランス語の「はい」にあたり、賛同を意味する言葉。

(注3) 古歌：ここでは鎌倉時代に作られた和歌「草の名も」のことで、「草の名前もその土地によって変わるものだよ。難波でいう草は、伊勢で浜荻と呼ばれるものである」という意味である。

(注4) はじめに状況ありき：「はじめに状況があつた」という意味。『聖書』(「ヨハネによる福音書」)にある「はじめに言葉ありき」の表現を踏まえている。

- (注5) 芭蕉俳句集…松尾芭蕉(一六四四〜一六九四年)が十九才から亡くなるまでに作った俳句(発句)を収めた本。「古池や蛙飛こむ水のをと」は「ふるいけやかわずとびこむみずのおと」と読み、芭蕉の作品中でももつともよく知られている句である。
- (注6) 混淆語…様々な言語や表現が入り交じっている言葉。
- (注7) 怪訝な…不思議で納得がいけない様子。
- (注8) ア然と…本文にはこのようにあるが、「啞然と」と書いて、予想もしなかったことに驚いて言葉が出ない様子を表す。

問一 波線部 a、c の本文中での言葉の意味としてもっとも適当なものを選んで、それぞれ記号で答えなさい。

- a シヤクなので
- ア 残念なので
イ はずかしいので
ウ 申し訳ないので
エ 不愉快なので
オ 困るので
- b 丹念に
- ア 整然と並ぶように心がけて
イ 細かい所まで注意深く丁寧に
ウ 繰り返しイメージを描きながら
エ 一字一句間違えのないように
オ 周りのことには目もくれずに

- c 意表をつかれ
- ア 突然話しかけられてとっさに
イ 相手の気持ちを理解して
ウ 言葉の意味も分からぬままに
エ 思っていたことを言い当てられ
オ 思いも寄らぬことに驚かされ

問二 傍線部①「ラクダ、ロバ、ニワトリ、アリ、ヤシ、スナ、ソラ、タイヨー」とありますが、この場面を表現するのに漢字や平仮名ではなく、カタカナを使ったのはなぜでしょうか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 日本語の文字ではなく、アラビア文字で書き込んでいったことを強調するため。

イ 言葉そのものが持っている一音一音の音声の響きを、特に重視して表現するため。

ウ カタカナ表記を用いて、日本古来の言葉ではない外来語のように感じさせるため。

エ 漢字や平仮名では、教える時にゆっくりと発音したことが書き表しにくいいため。

オ カタカナの文字を使うことで、言葉に含まれるイメージを抱きやすくするため。

問三 傍線部②「そんな名詞のいくつかを覚えたところで、日本語を話せるようになるわけでもない」のは、日本語がフランス語に比べて根本的にどのようなことが異なるからですか。その説明文となるように、次の文章中の空欄ア～ウに入る適当な語を本文中からそれぞれ二字で見つけて、文章を完成させなさい。

日本語を覚えようと思った時に、フランス語との「名称」の違いに目が行きがちだが、最も重要なのは（ア）や（イ）の違いを学ぶことである。なぜならば、（ア）や（イ）の違いは、言葉を使う人の（ウ）のあり方の違いに結び付いているからである。

問四 傍線部③「私は思わず笑って『ナイ・ツカレタ』と答えた」とありますが、このことが「私」にとってどのような経験となったのか、その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

ア 歩き慣れない旅に疲れを感じていた「私」の身を案じて、何度も声をかけてくれるラルビーの優しさに触れ、異国の地で心温まる思いを抱くことができたという経験。

イ 片言の日本語でも懸命けんめいに使うというラルビーの努力を惜おしまない姿勢を目の当たりまにして、何とかして彼の気持ちに添そえてあげたいと心から感じたという経験。

ウ ラルビーが「ツ」と発音できずに「トウ」と話すことをおかしく思い笑いをこらえていたが、そのような違いはたいしたことではないことに気付かされたという経験。

エ 単語だけを日本語に入れ替え、母国語の語順で話すラルビーの会話がおかしかったが、そのことから言葉と思考の働きについて考えるきっかけを得たという経験。

オ ラルビーとのささいな会話から、長い間考え続けてきた言葉に関する疑問点を一気に解決させることができたという、喜びと感謝の気持ちが込み上げたという経験。

問五 傍線部④「どんな民族も母国語の筋道に従って思考する」とありますが、「フランス語を用いる人」と「日本語を用いる人」とでは発想の筋道がどのように異なりますか。解答欄に合わせて、まず最初に何をするか、それぞれ二十字以内で答えなさい。

問六 傍線部⑤「それだけで詩なのか」とありますが、芭蕉の句が日本人にとって「それだけで詩」となり得るのは、日本人が事実に対してどのような考え方をするためでしょうか。それを説明している部分を二十字以内で見つけ、最初と最後の三字を抜き出しなさい。

問七 空欄xに入る四字熟語を次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 一心不乱 いっしんふらん イ 危機一髪 きまいっぱつ ウ 試行錯誤 しこうさくご エ 無我夢中 むがむちゅう オ 興味津々 きょうみしんしん

問八 あなたが海外生活をしていた国で、使用されている言語は何でしたか。また、そこでの生活や見聞した事柄ことがらの中で感じた、日本人とは考え方が異なる習慣や生活の仕方などを具体的に一つ挙げ、その違いから考えられることを述べなさい。